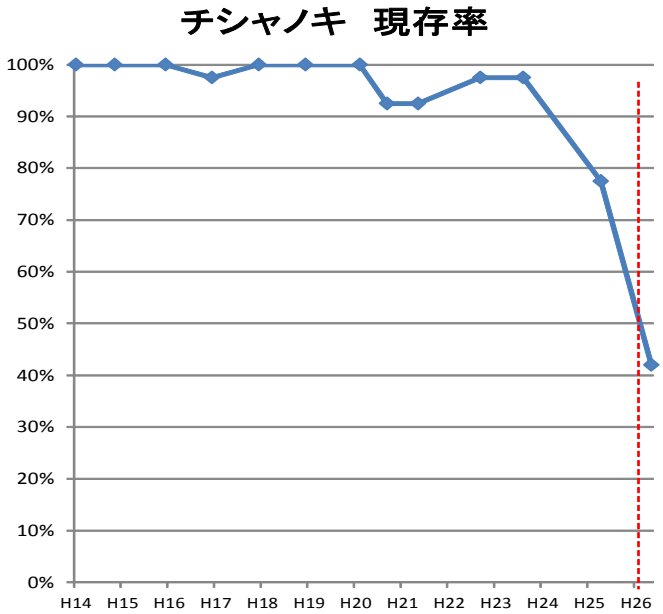
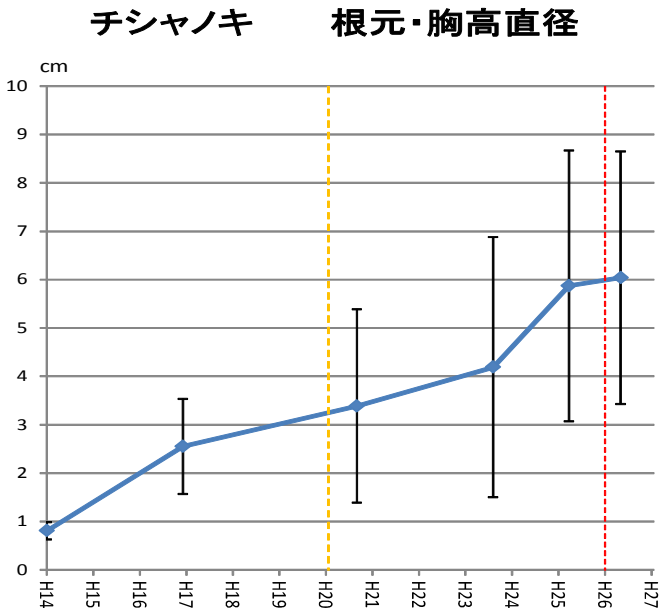
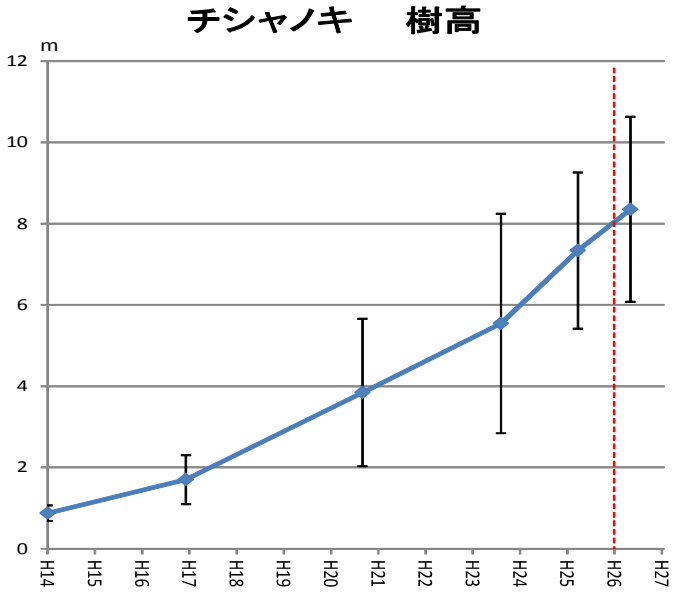
樹種名	チシャノキ
科　目	ムラサキ科
学　名	*Ehretia ovalifolia*
分　布	本州の中国地方、四国、九州、琉球諸島、国外では中国の低地を中心に分布する。
樹木特性	半陽樹であり、川沿い等の湿地帯を好み、樹高 15m 程度にまでなる。 成長スピードは遅いことが知られている。 若葉は天ぷらなどにして食べられる。
用　途	材は黄白色で、建築、家具、器具材として利用の他、樹皮および材から染料をつくる。
植栽本数/面積 （植栽密度）	100 本 （他樹種との混植）
特　徴	【樹　形】 常緑高木であり、樹高は 10~20m になる。 葉は長さ 5~12cm、幅 3~7cm で縁には細鋸歯があり、葉の先端は急に細くなって尖るが、小さな葉ではその傾向はあまり顕著ではない。表面にはまばらに毛があるが、見た目には無毛に見える。裏面は脈上にわずかに毛がある。6 月から 7 月にかけて枝の先端に円錐花序をつける。花は白色で花冠は直径 5mm ほどで、5 裂するものに 6 裂するものが混ざる。 果実は、直径 4~5mm の球形で黄褐色に熟す。
試験地での様子	ポット苗を植栽した直後は活着していたが、植栽後 6 年を経過した頃より枯死が発生した。 現存率は 42 %となっている。平成 14 年度に改植し 12 年が経過した平均樹高は 8m 強と成長量は大きい。
被　害	特になし。



【現存率】
植栽後、6 年以上経過した頃より原因不明の枯死が発生している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 42.0%であった。
さらに、当試験地には自生したチシャノキが 1 本現存しており、生育は非常によい。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



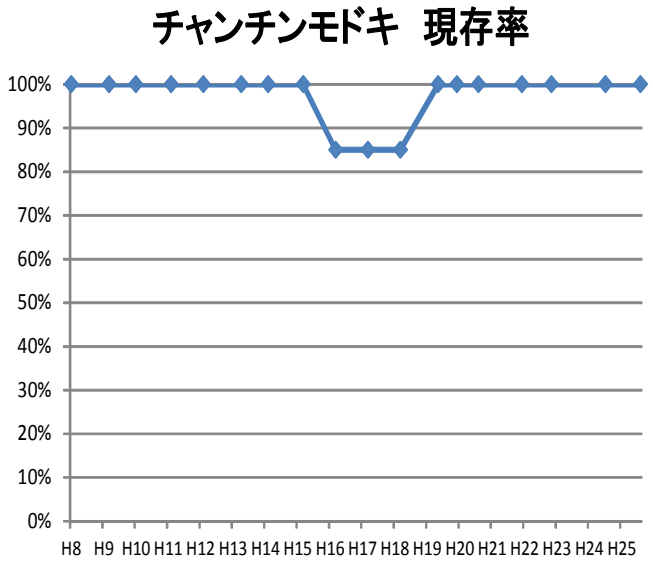
【根元・胸高直径】
順調に成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 6.04 ㎝であった。
さらに、自生しているチシャノキ（1 本）の胸高直径は 18.40.㎝であり、植栽木より大きい。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。
※　オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

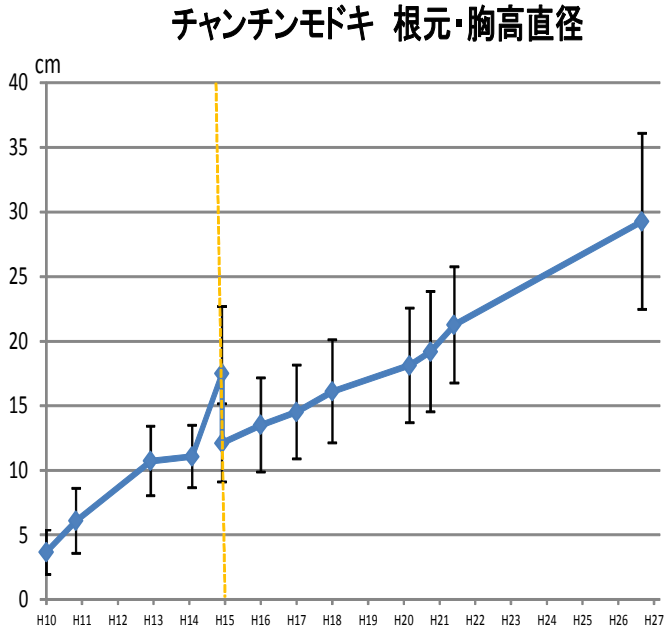


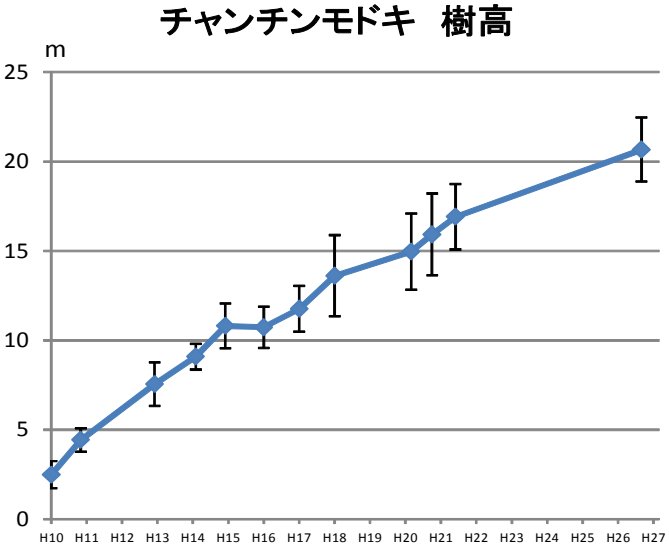
【樹　高】
順調に成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 8.35m であった。
さらに、自生しているチシャノキ（1 本）の胸高直径は 11.48m であり植栽木より高い。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

《プチ情報》
和名は、若葉の味がチシャに似ていることから。また、樹皮や葉がカキノキに似ていることから、カキノキダマシともいう。
エゴノキ科のエゴノキもチシャノキといわれ、歌舞伎（かぶき）『伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）』に出てくるチシャノキはエゴノキのことである。チシャノキ属は世界の熱帯を中心に約 50 種ある。

樹種名	チャンチンモドキ（別名：カナメノキ）
科　目	ウルシ科
学　名	*Choerospondias axillaris*
分　布	北部九州以南、国外では中国南部、東南アジア北部、ヒマラヤに分布する。
樹木特性	センダン科のチャンチンに似ていることからチャンチンモドキの名がある。チャンチンモドキの花は赤褐色、チャンチンの花は白色ということで容易に判別できる。
用　途	庭園木、公園樹、街路樹の鑑賞等 材は建築、楽器、器具材として利用。
植栽本数/面積 （植栽密度）	5 本／ 0.002ha （3,000 本／ ha）
特　徴	【樹形】 落葉高木であり、樹高は 15~25m になる。 樹皮は赤褐色で縦に細く裂け、薄く剥がれる。 雌雄別株で 5 月頃に暗紫色～赤褐色の花を咲かせる。 葉は互生で奇数羽状複葉。小葉は 3~6 対あり、長さは 6~9 cmの歪んだ披針型で先端は細長くとがり、裏面は淡緑白色。雌雄別株であり、5 月に暗紫褐色～赤褐色の小さな花が開く。 核果は 3 cmほどのほぼ球形、11 月に黄色から橙色に熟す。 冬芽は，赤褐色の芽鱗で覆われ，先端は尖る。維管束痕は小さな白い点が大きく３カ所に別れて見られる。
試験地での様子	ポット苗により 5 本を植栽し、その後 1 本が枯死したため平成 19 年度に 2 本補植し、合計 6 本が現存している。
被　害	特になし







【現存率】
平成 26 年に毎木調査をした結果、6 本が現存している。

【根元・胸高直径】
平成 26 年に毎木調査をした結果、平均胸高直径は 29.28 ㎝であり、順調に成長している。
※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

【樹 高】
平成 26 年に毎木調査をした結果、樹高は 20.67m であり、上長成長スピードは早く、順調に成長している。

《プチ情報》
チャンチンモドキには「モドキ」が付記されており、本物のチャンチンの木がある。チャンチンモドキとチャンチンの 2 つの木はともに、葉の付き方が羽状複葉・互生で、どちらも結構な大木に育つ。しかし、チャンチンが白い花を付けるのに対して、チャンチンモドキは真っ赤であるから、花期にははっきりと区別できる。また花期も、チャンチンが 6 月であるのに、モドキは 5 月である。さらに、チャンチンモドキはウメに似た大きな実をボトボトとおとすが、チャンチンは蒴果をつける。

《参考》
チャンチン：センダン科のチャンチンは、中国原産の高さ 30m にもなる落葉高木で、香りのある新芽が赤紅色であることに、今までにはない印象深いものを感じる。渡来したのは江戸時代初期に来日した明の高僧が、宇治市の万福寺に植えたのが初めてといわれている。チャンチンは中国名を「香椿・チャンチュン」といい、呼び名が転訛してチャンチンとなったものである。センダン科の仲間であるチャンチンは、通直な幹と羽状複葉、6~7 月ごろ枝先に 20 ㎝前後の大きな円錐花序を出し、小さな白い花を多数をつける。秋に木質の蒴果が熟し、裂開して翼のある種子を撒布する。材質は固く光沢が美しく、建築材、家具、器具材に用いられる。チャンチンの香り高い新芽は、宇治市の万福寺の普茶料理の一品として用いられる。